

「底が突き抜けた」時代の歩き方 110

映画『LUNA PAPA』－「まだ生まれていない子」のまなざし

タジキスタン映画『ルナ・パパ』はエキセントリックで、不思議な映画である。パフティヤル・フドイナザーロフ監督自身認めるように、シャガールの影響が大きく感じられる幻想的な作品でもあるが、監督は意識していなくても、シャガールの影響という点でクストリッツアの『アンダーグラウンド』との類似が指摘されるのであろう。「月夜の恋に、未来を宿した」と映画パンフに記されている映画の筋は、それほど入り組んではない。

女優を夢見る17歳の少女は、精神を病んで戦時中の行動を繰り返す兄とウサギ農場を営む厳格な父の三人で、タジキスタンの小さな村で暮らしていたが、ある日、村にやってきた劇団のシェイクスピア劇を見そびれ、がっかりした彼女は森の中へ引き込まれていく。青い月の夜、暗闇の中から男に声を掛けられ、誘われていくと不思議の国のアリスのように暗闇から転げ落ちて、次の朝彼女は崖の斜面に半意識状態で熱に浮かされたように横たわっている自分を見出す。やがて妊娠していることがわかり、激怒する父親と兄の三人で「父親探し」の旅に出る。少女は相手の顔を全く見ていないので、相手が見つかる筈がない。お腹が大きくなっていく少女を村の女たちは、「売女!」とののしり、子供まで「スイカ女」とはやし立てる。墮胎にも失敗した少女は一人旅に出て、遂に子供の父親になってくれる青年を見つける。だが結婚式の日、突然空から大きな牛が落下して、父親と青年は死に、喜びに湧く結婚式は一転悲しみに包まれる葬儀になるのである。

この空からの牛の落下は実際に起こった出来事に基いている。盗んだ大きな雄牛が暴れたために飛行機から投げ捨てたところ、カスピ海に浮かんだ小さな漁船を直撃し、夫、兄、父親が死に、残ったのは妊娠した娘たった一人であったという。この予期せぬ意外なシーンには魂消^{たまげ}たが、またもや村人のいじめに家の屋上にまで追い詰められた少女が、天井の扇風機をプロペラ代わりにして、家の屋根に乗って飛行船のようにゆったりと空に飛び立っていく、最後の幻想的なシーンにも目を見張られる。しかし、なんといっても、いまでも目の前にありありと思い浮かぶ美しい魅惑的なシーンは、「父親探し」の旅の途中で少女が真ん円い月^{ままる}を舞台にして、車の上で舞い踊る幻想的なシーンであろう。Luna は月の女神のことであるが、月光を全身に浴びながら乱舞する少女はさながら月の精にみえる。

闇の中の相手がみえないままの妊娠となると、マリアの処女懐胎を連想するが、ソ連崩壊という事態に対応できず、混乱した政治を行う共産党と、民主主義や民族主義

やイスラムの旗を掲げた反対派の間で、92年5月に内戦が起こり、97年6月に和平協定が結ばれて、内戦は形式上終結したものの、依然として中央アジア情勢がくすぶり続けているなかでのタジキスタンについて考えると、少女は月光によって懐胎し、「未来を宿した」とファンタジックに夢見るのが、この映画にふさわしいと思われる。

監督インタビューで、「人がどうにもならない状況に陥った時は、奇跡を待つものです」と、屋根が飛んでいくラストシーンについて語っているが、この言葉は、「絶望する映画を作るのは罪だ、観た人が幸せになるような映画を作りたい」という彼の映画に対するスタンスとつながっている。絶体絶命の状況のなかで希望を紡いでいくことこそが奇跡であり、その奇跡を描くために自分の映画はある、ということであるからだ。戦争の後遺症を残している兄、父親不明のまま妊娠した妹、村人たちの非難のまなざし、結婚式での父親と婚約者の予期せぬ死、妊婦を死の淵にまで再び追い詰める村人たち。どの場面を選択しても、希望は微塵もない。希望はどこに輝いているというのか。奇跡はどこに埋もれているというのか。

絶望とされている事態こそが奇跡の証ではないか、と映画は語っているように聞こえる。父親がわからぬまま少女が妊娠したことが、絶望の種子となっているなら、それが希望の種子であるように少女が生きていくことこそが奇跡ではないのか、そう言っているのだ。少女の名前、マムラカットとは、`大地` `国家`を意味する言葉だそうで、本当は大地づくり、国づくりを志向する`希望`を意味するのが、最もふさわしい気がする。月夜に身籠もったことが希望でない筈がない。屋根が飛んでいくシーンはもちろん、「ルナパパ」に向かっていたのである。

タジキスタン版「かぐや姫」のような気がしないでもないが、ここでしばし`月光浴`を味わいたくなってきた。日本では月といえば、花鳥風月、雪月花などと風流さが漂い、三日月、上弦、満月、下弦と満ち欠けを繰り返して、古来から興味が尽きなかった。月の満ち欠けや引力は動植物の活動に影響を与えるし、月光に照らされて我々は心が満たされ、満月に対面すると、そこはかと心が乱れ、妙な気分になってくる。

写真家で作家の藤原新也が、23年前の異様な光景について書きとめていた。真っ青な民族衣装をまとった男たちが数十人、モロッコの砂漠に座り無言でじっと月を見つめていたというのだ。また、69年7月20日、アポロ11号が月着陸を行った時のこと、イランのある地方の町に居て、イスラム教徒達がなんと、「アメリカは悪魔だ!」と叫んでいるのに彼は出会った。「神聖なるものを土足で侵入した」ということなのだ。続けて彼はこう書く。「思うにアポロ11号は地球の様々な民族や国々の中に千年単位で語り伝えられる月にまつわる無数の神話や民話を一瞬のうちに無力化したと言わねばならない。自由の国の手になる情報化が人の心の中に無限に広がる想像力(自由)を奪い去ったのである。」(99年8月22日付朝日新聞)

そういえば、砂漠と言えば月であり、キャラバンのイメージが我々には刷り込まれている。

この映画が特筆に値するのはなんといっても、少女の胎内にいる「まだ生まれていない子」のまなざしでストーリーが語られている点だろう。監督は「この物語の主人公は、まだ生まれていない子です。映画には姿も現わさないけれど、この子供の視点で描いているため、ファンタジックな物語になりました。子供はとてもファンタジックです。子供は大人に見えないものが見える。或いは、ぼくたちも見ようと思えば見えるけれども、見ることを忘れてしまっているから」と語っている。その子の名はカビブラ、どんな意味なのか、まさか「奇跡」では？ その子が「そろそろ外へ出る時だ」と言って、映画は終る。永遠に自分たちを包み込んでいた因習と戦争の胎内から出られない人々にむかって、「さよなら」とたぶん手を振りながら。

ところで、「まだ生まれていない子」は月（光）からの授かり物とみる、この^{いにしえ}「古」からある考えは、現代の親子関係に新しい示唆を与えてくれる。同志社女子大学教授村瀬学は00年8月31付朝日新聞で、こう言っている。「13歳になると、どんな親子でももう一度親子を契約し直し、さらに親子を続けるなら『養子』縁組をすることが考えられてもよいのではないか。ここでの「養子」は民法上の概念ではなく、「『契り』という『関係』の中での『自分』を創り出すことであり、そういう自分を自分の親として意識し直す智慧」のことであり、13歳が家から社会へ飛び立つ時期であるなら、もはや子は親に育てられる関係から社会に育てられる関係へと進み、自分が自分を育てる関係へ踏み込まねばならぬ。親に育てられる時期は終わったから、「本当の親は自分」であることを確認するために、かつての育て親とは「養子」縁組をすることが考えられてもいい、ということなのだ。

「人工生殖や代理父母が広がる21世紀は、『親に成る』とか『子に成る』ということは、もっとちがうモデルで考えられる時代に入る」ことを想定して、村瀬氏は提案しているのだが、映画『ルナ・パパ』から遠く喚び起こされるのは、もともと子供はすべてどこかからの「授かり物」であり、子育てを委託されているにすぎないということである。そこでは、自分を自分で育てられるようになるまで、子供を上手に育てるかどうか問われているとあってよい。したがって、育て親としての仕事は、子供を子供自身に還していく準備期間ということなのだ。少女の妊娠から始まっていく、映画の物語を語り進める「まだ生まれていない子」のまなざしとは、この世界に生み落とされた自分に充分成るまで、果てしなく戦い続ける母親の苦闘が見据えている遙か死者の彼方に届くものではないだろうか。

2000年9月27日記